

多摩川ーアキシマクジラ発見



発掘作業の様子

昭和36年(1961)8月20日。JR八高線多摩川鉄橋の下流36mの地点の河川敷から、当時玉川小学校田島政人教諭により、長さ10センチ、はば3センチぐらいの長方形の感じの化石(クジラの頭の一部)が地表に露出しており、他に周囲10mほどの範囲に砂岩層のなかに点々と化石の隠れている小穴を発見した。

発見当初はクジラの化石ともわからず、国立科学博物館古生物部長尾崎博博士や立教大学石島渉教授等の指導のもと発掘が8月30日から9月3日まで行われ全長16mのクジラの化石と判明した。その後、尾崎博士らの鑑定により、その形状や歯のあとがないところから、ひげクジラの仲間で、コククジラに近い種類であるが、今までに無い新種であることがわかりました。

クジラの全長と生息年代は、それぞれ16m、500万年前→12m、160万



発掘された化石の部位(赤色)

年前と言われてきましたが、昭島市社会教育課の伊藤課長は「今年の1月1日に、日本古生物学会学会誌に群馬県立自然史博物館の木村学芸員らがアキシマクジの論文で、これまでに世界で見つかっていなかった新種として発表され、学名も E. アキシマ

エンシスと昭島の名前が入りました。この中で化石の年代は約200万年前のものとして記載され、また、最近の研究により全長も約13.5mと推定されました」と、述べています。

この年代は日本の国土の原形がほぼ出来上がった時代で、この地域が海底だったことを示す化石でもありました。

クジラの化石の骨格がほぼ完全な形での発見は世界でもめずらしいことで、当時のビック

ニュースとして、新聞、ラジオ、テレビで報道され、発掘時には、都心や隣県からも「太古のクジラを一目みたい」組と「あわよくば自分でも化石を発見したい」組と大勢の見物人が押しかけて来て、夜になると、化石の一部を欠いて持ち去る者も出て、河原にテントを張り、市職員が寝ずの番をしたほどでした。



化石から復元された生息時の想像図

石を発見したい」組と大勢の見物人が押しかけて来て、夜になると、化石の一部を欠いて持ち去る者も出て、河原にテントを張り、市職員が寝ずの番をしたほどでした。

発掘した化石は、成隣小学校のあき教室に保管され、市内小・中学校教員の有志が集まり、尾崎博士らの指導のもと、復元作業が行われ約1年後の37年(1962)8月23日完成した。そして、尾崎博士により「アキシマクジラ」と命名されました。その年12月14日~16日に一般公開された。

- **アキシマクジラは今何処に?**—現在、この化石は群馬県立自然史博物館に新種の模式標本として大切に収蔵されています。
- **昭島市のシンボルーアキシマクジラの化石の発見は、誕生もない「昭島市」(昭和29年(1954)、当時の昭島町と拝島村が合併)の名を全国に知らしめる大きな出来事でした。**
 - ・ 現在では、看板やマンホール、お菓子に至るまで、市内の至る所でクジラのデザインが見られる。
 - ・ 夏の風物詩—昭和47年(1972)「市民納涼の集い」に「大クジラ」の山車が通りに繰り出し、平成14年(2002)から名称を「昭島市民くじら祭」と改めた。
 - ・ ふれあいの場—クジラの発見場所近くの多摩川緑地に「クジラ運動公園」昭和56年(1981)8月に整備し開園した。

(掲載写真はすべて昭島市社会教育課より提供されたものです。)